假名垣
曽文作
梅堂
國政画
金松堂
壽梓
二編中
二編上

結野
一重咲き
さくら花
なんるのよすじ
岡の
重咲
戀相場花毛夜嵐
一編上

A516
4

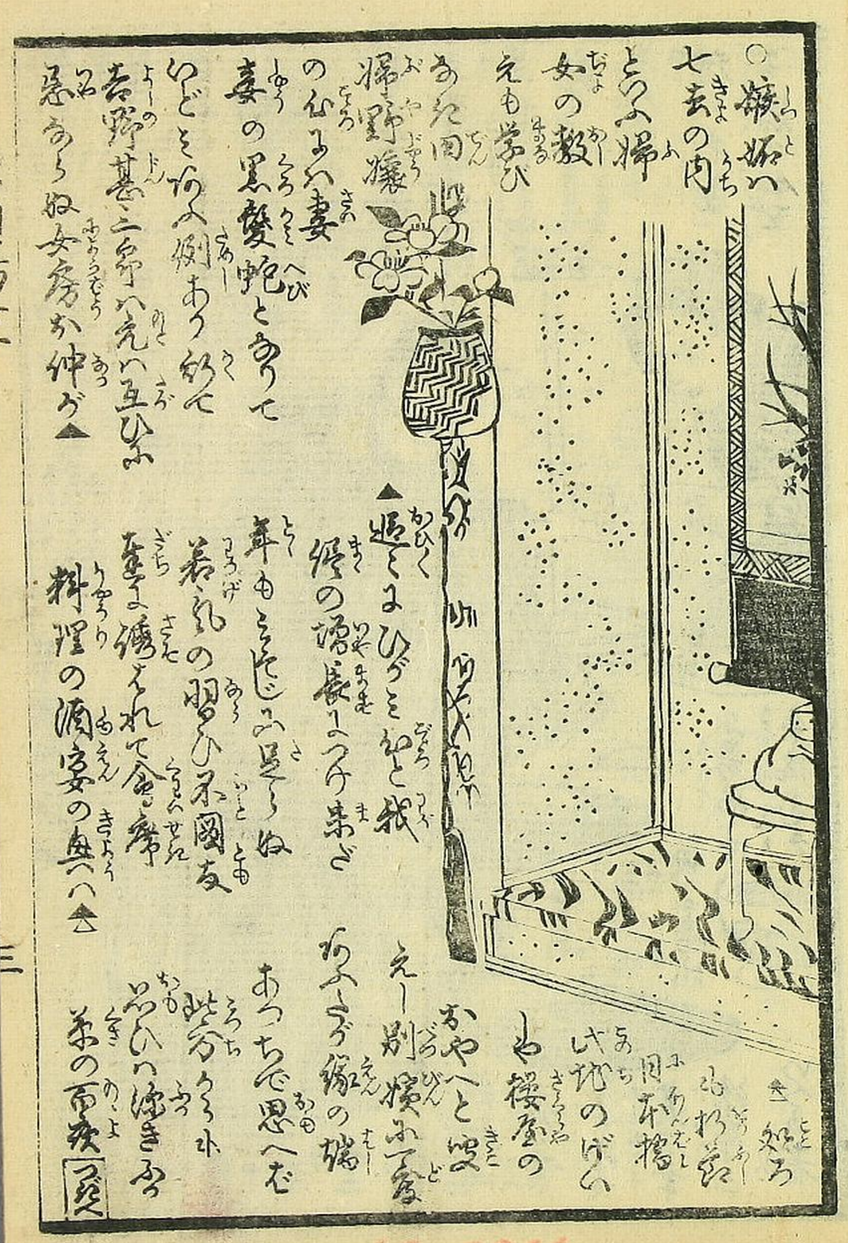
48-7712

青年不良の心を生ずる其原全く色と酒と女を敵視せよとの。昔氣質の心學流の其学校く其智進き開けぬ時の強異見鳴呼當世の不良心なる。狡智滋して悪意と変ずる。怪化人の生兵法所謂大疵の資本算段猟兒の腹稿如何を問ふ文明の世ハ田童野夫も。オカ餘ふべ参政ふ。預る青雲の桟と。踏越るも容易ふして。先其オカふ貪った者ハ蓄財の富豪ふ不如金さ人持てば馬鹿も怜悧新発明ハ他人を雇ひ。その才学を月給ふて。買も安しと凌雲の富と。一圖ふ掴ん欲の皮遂ふ破れて荒木等が。のろく散さる仇ぎとらハ。重ふ一重と混交く。此第二編の梓の花を。咲きらふも鳴呼成る

明治十三年季秋　　假名垣猫叟記

お仲母お繁
甚三妻お仲

悪者江戸金
吉野甚三郎



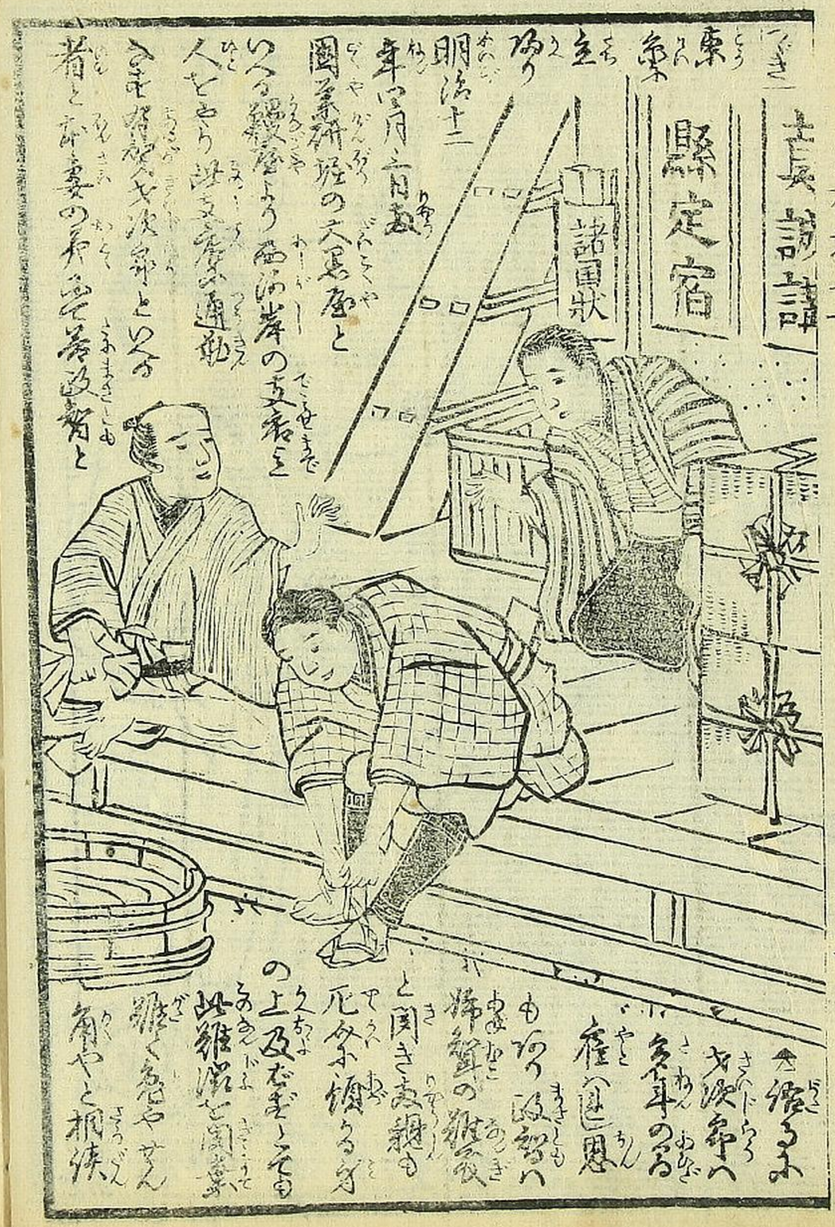
○嫉妬
七去の内
とつの婦
女の教
えも学び
あれ田舎
婦野猿
のむすめ妻
妻の黒髪蛇と成て
ねどこなく例あり紀
若野基二郎は元い互ひ
惡あらぬ女房か仲ゲ▲

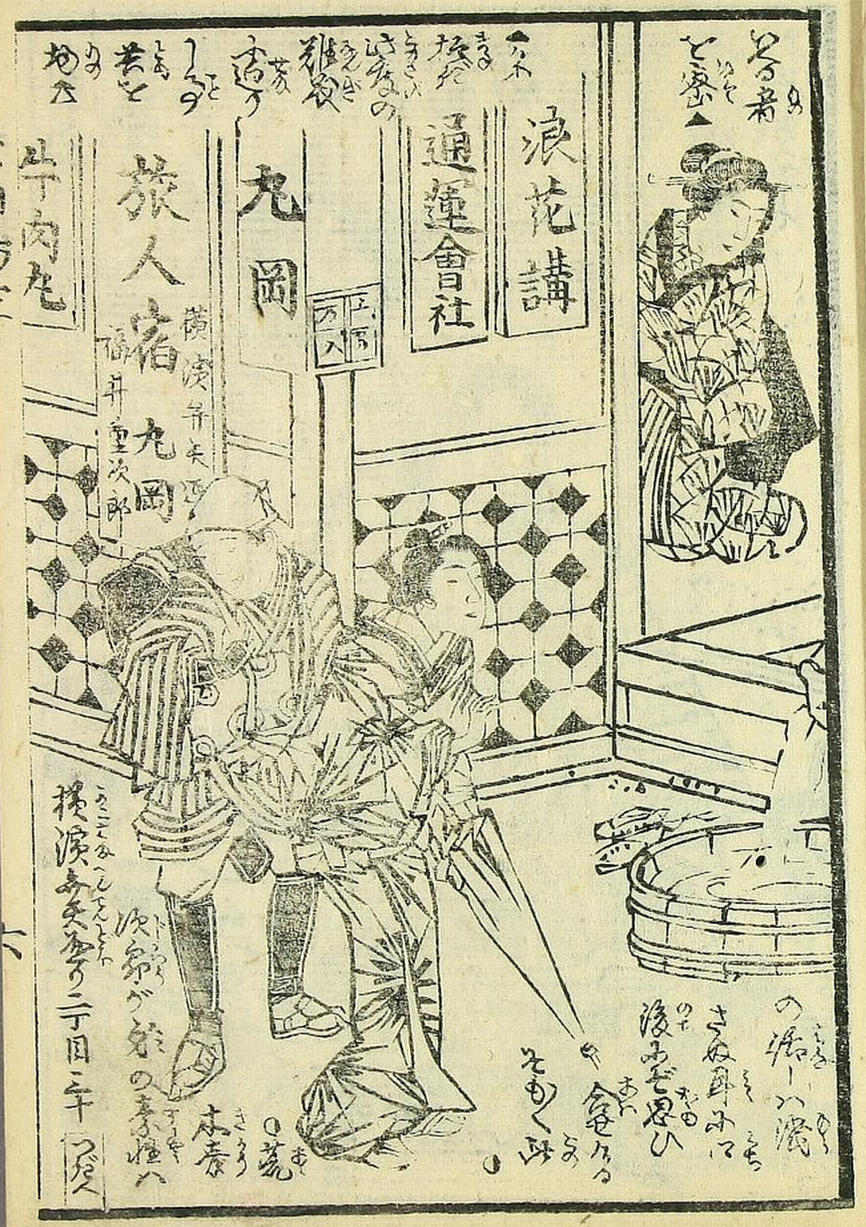
▲姫とよひなを知と我
俗の婦長とつ朱ざ
年もとたしみ昼つぬ
若乳の習ひ不図友
奉公に傳えれて金帝
料理の酒宴の無八会

如ろ
田舎
ばけ地のげい
も樓屋の
かやへと
え一別嫁ホ
ゆふ子縁の端
あつちを思へば
此分ろ
ゆへ
茶の百姓

つゞき

通ひの約束遠くも或は合の
酒り込より重ねる花数をひてのゝ
さゝ中とぞ有りふる
○祈とのおやくへ
いとの舞場町うて
初めての義枝
とおりしをぶへ
未ざ
ゐく
高砂若
橋の色重
よ客のむと


長詩講
縣定宿
諸国狀


浪花講
通運會社
丸岡
旅人宿 丸岡
横濱弁天通
福井重次郎
牛肉丸

つぎ 篇

地の開港

港内風俗の様人

福本源兵衛

長男オーて

甚

同屋を出初ー

久ぶりふと聽

通せーや金

銀

生まれつき肝ちく

親の縁りの妹

親在老生涯

くらまいはなりの業

人ちゃらくら十年

二十の年ハ春て

色ちらちらと浮世

の憂ぬ乳の憂大全

儲けをしらぬ者ゆえ

果るの症用の物のもしら大名法の

貧者の愛ゆゆりつうと腹ハ一物ゆ

うゆ妻隠れ法柔弟のあちこちへ流紋

重

貧乏の

乳と色表面と表裏ハ

わるい〳〵愛妾嫉妬のさ

ぎ

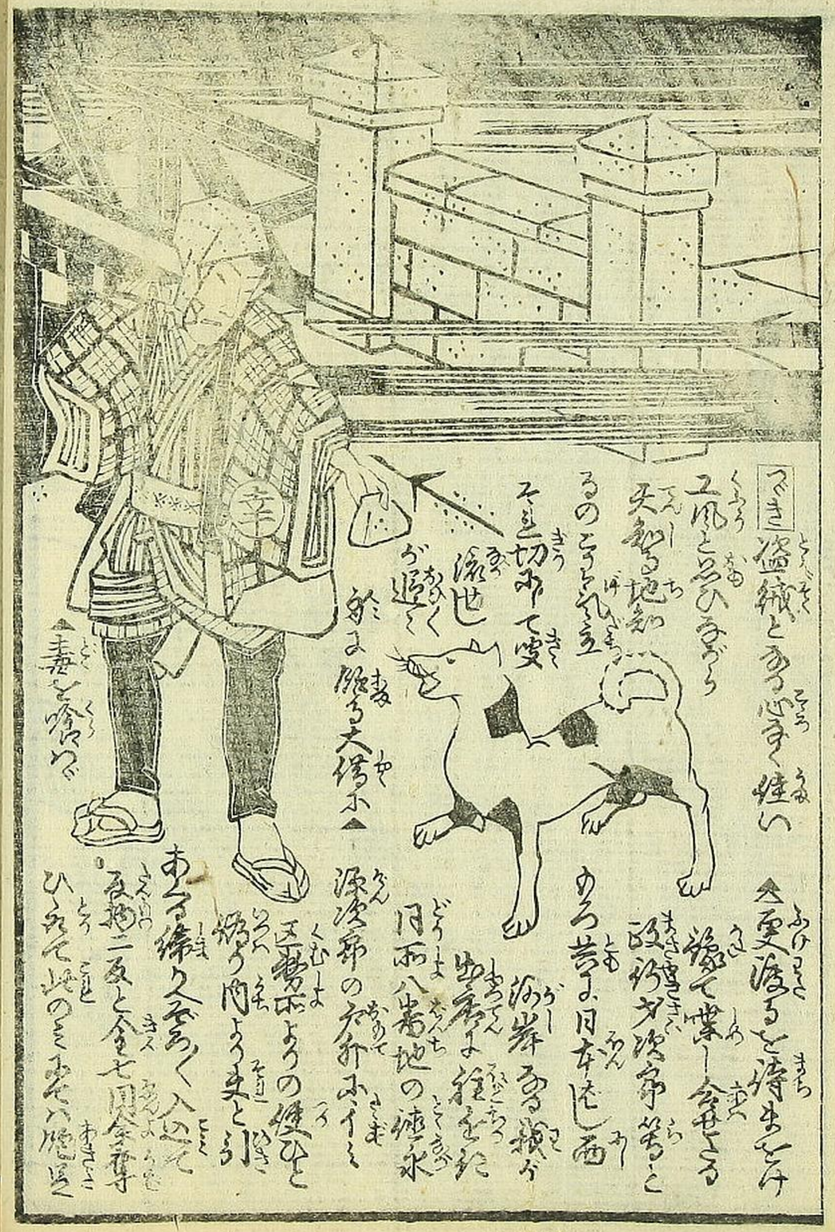
ひハ怪一妾と集ハ

後もなり渦う

次へ

政
十

幸



つぎ盜賊と為る心すく性い

△変遷すると待ちとけ

為て業一会せる

改行者次第等こと

のち昔より日本橋西

海岸通り

出張より往を

月西八番地の徳永

源次郎の方へ行ふ

三男栗よりの使ひと

為り門より来と引

あつて係りくるく人のて

百拾二反と金七円金弐

ひ来て此のこと次ハ慶応

四月十七日同十二年

二月二日夜の六

らねども盜人入りしと往ひ

人の立騒ぐ者ハ驚き立て

見るやみ源ち波と逃

うせさり彼て幸注家改行

女次郎ハ二人掛り取押

入りも行相もさく服の

（童蒙とありて者引の

動定なるぞと乳を苦ち月月

十六日の夜小金図を定め浅草

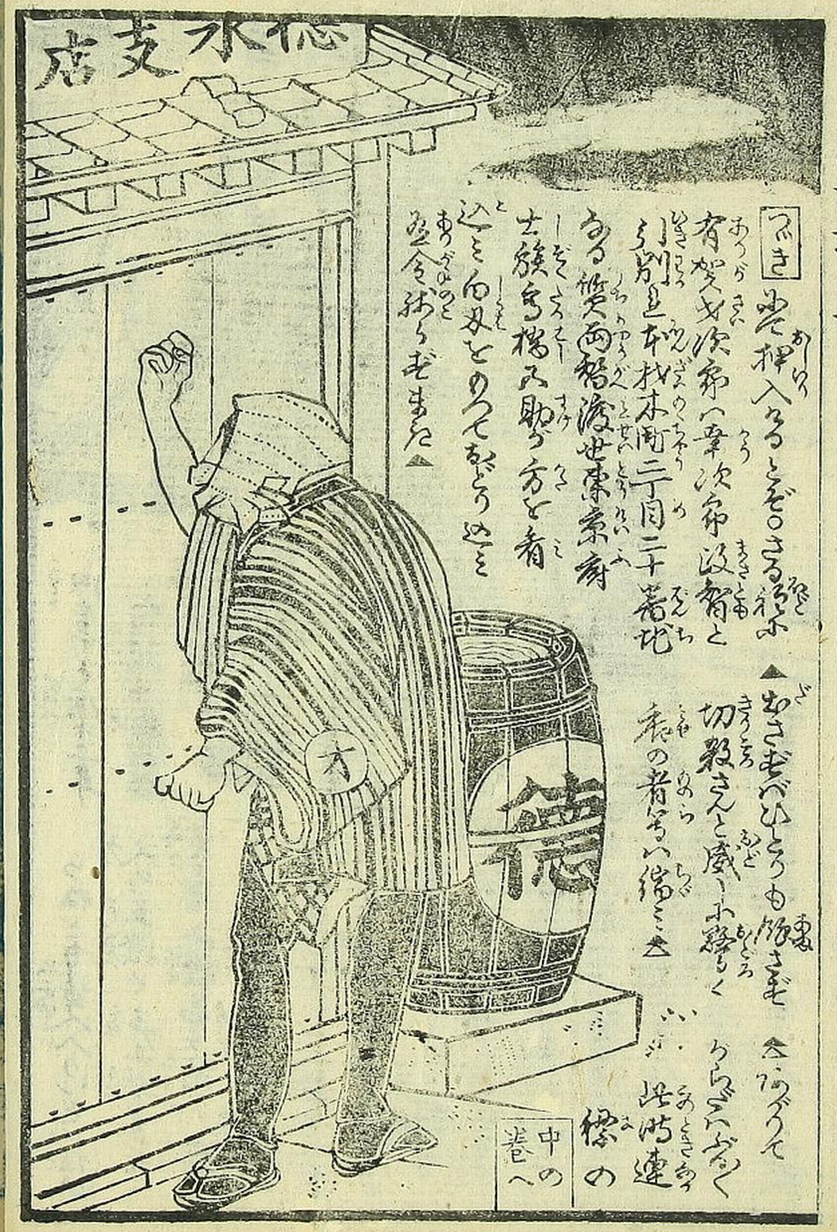
為富町六番地の質屋世宇郎

右義方へ押入金二十八円ろくい

れて夜板本町十二番地若松市

利助方へ改行と女次郎二人のこと

次へ



宮 牛肉九 計
宮 天麩九 計
文 鉄管問屋

010190517670

假名垣
魯文作
梅堂
國政画
金松堂
壽梓
二編中

A516
5

怨霊場花王夜嵐

二篇中

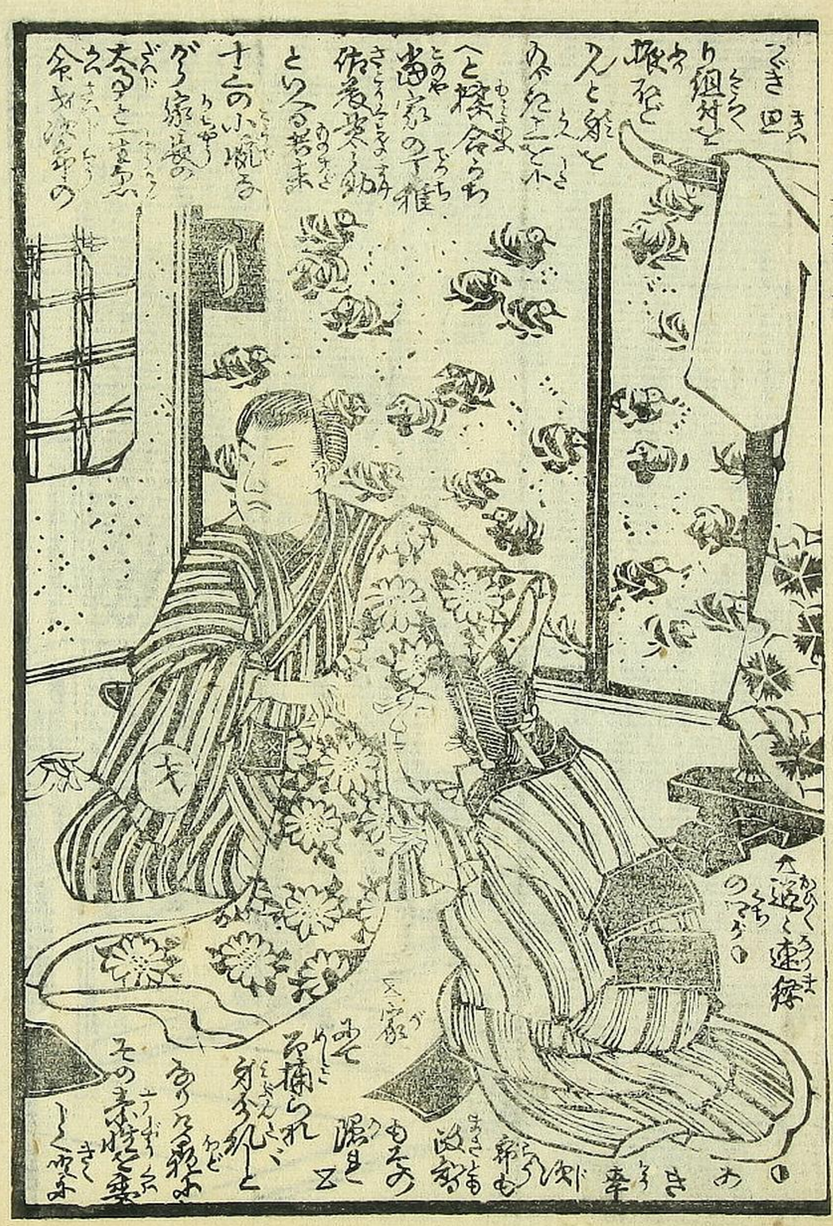
道人作
安政五周

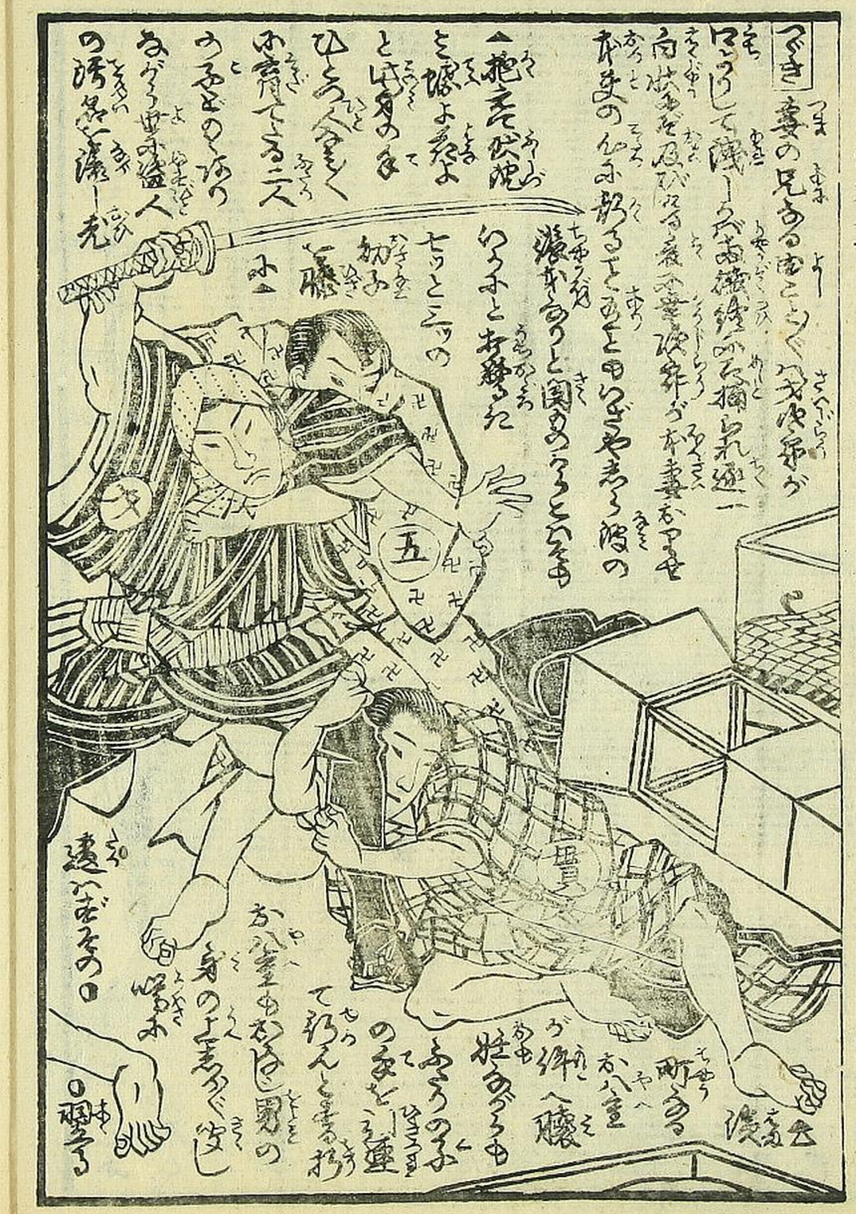
上の巻より

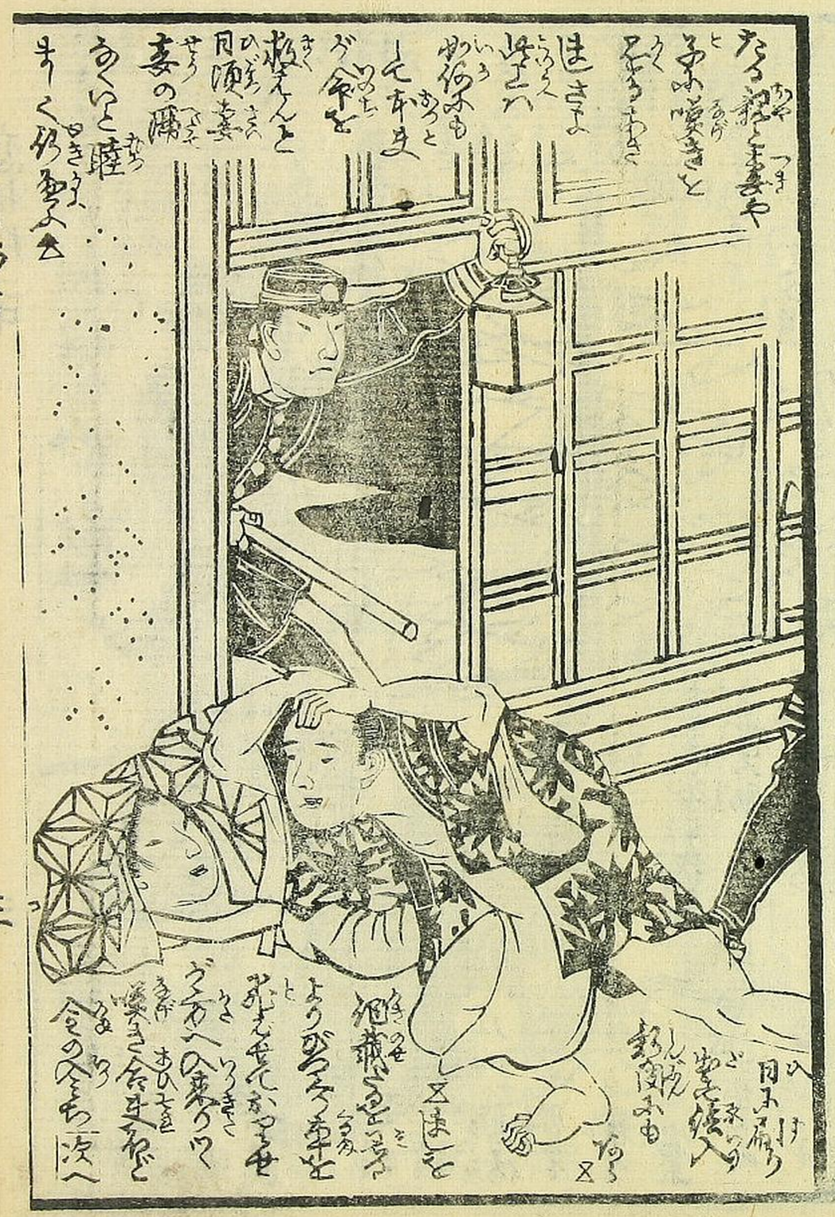
汲初めとて
日本無者さを
後くと汲おせん
と為付まさ
六時不敬しこう
治外の年返九州よ
りく出せと使ゞを打拍
為家のこの日じち橋文助へも漁師よと
立ちあがと女次郎六通ぢと侍人の沙鬼蛭
たよんえ助の設天橋底と負せ出さもへ
報きと公儀ちくと流石士族のふーも
屋敷を遠ゞたんろ女次郎の資後ふ 内八

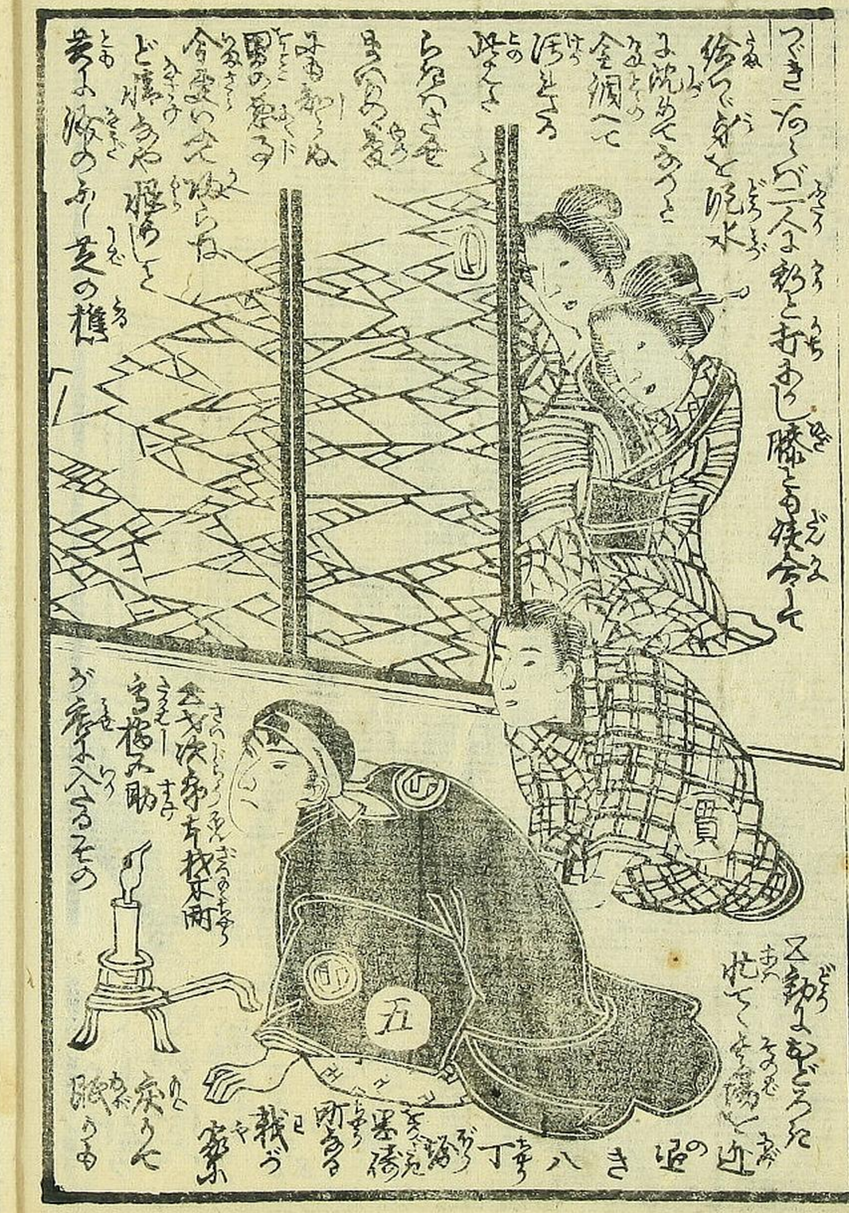
○姦の繪解まの
巻のあらまそ自然さとう。

48-7918








買
五

戈

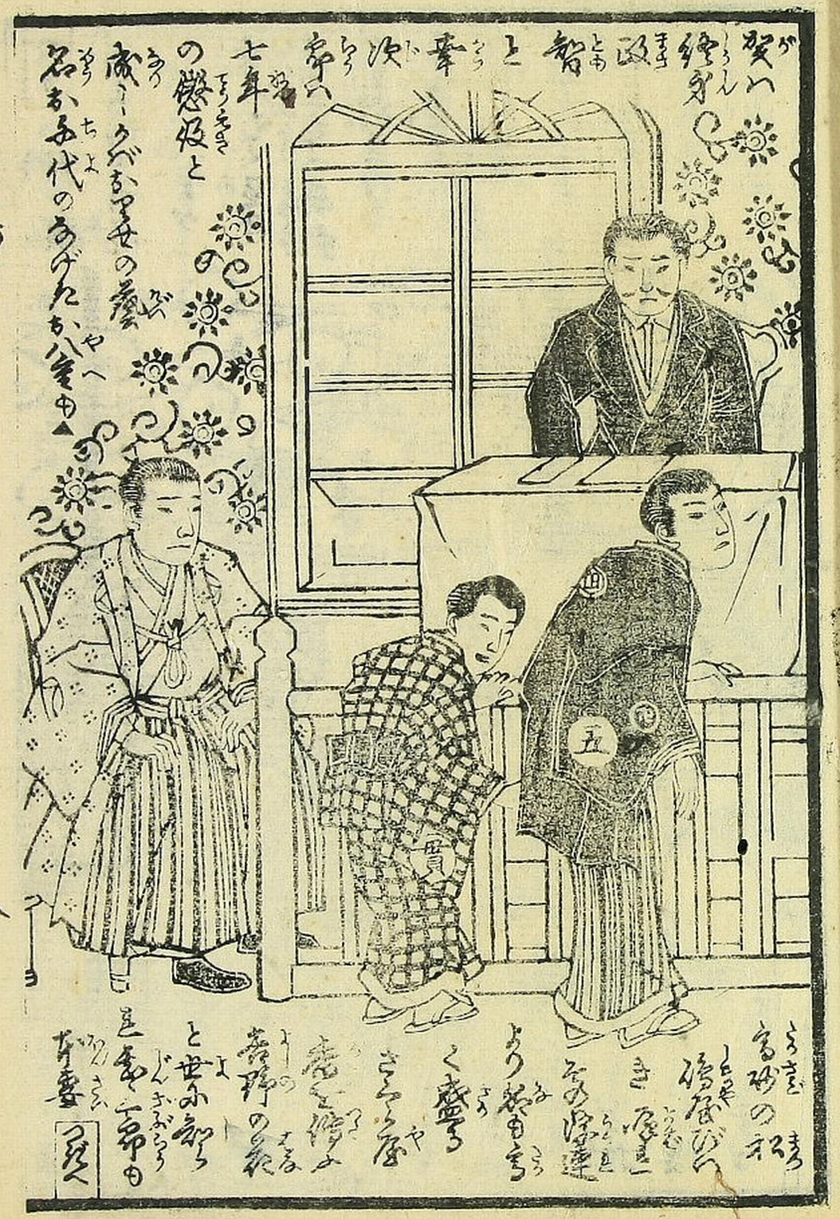
つき
政智の所とひ
逃んとすると
ようみじも
やらまを
矢倉ふの
石岡
署へと
巡査と捕
紙を
分一
と
ひ
と
と
と
と
と
と

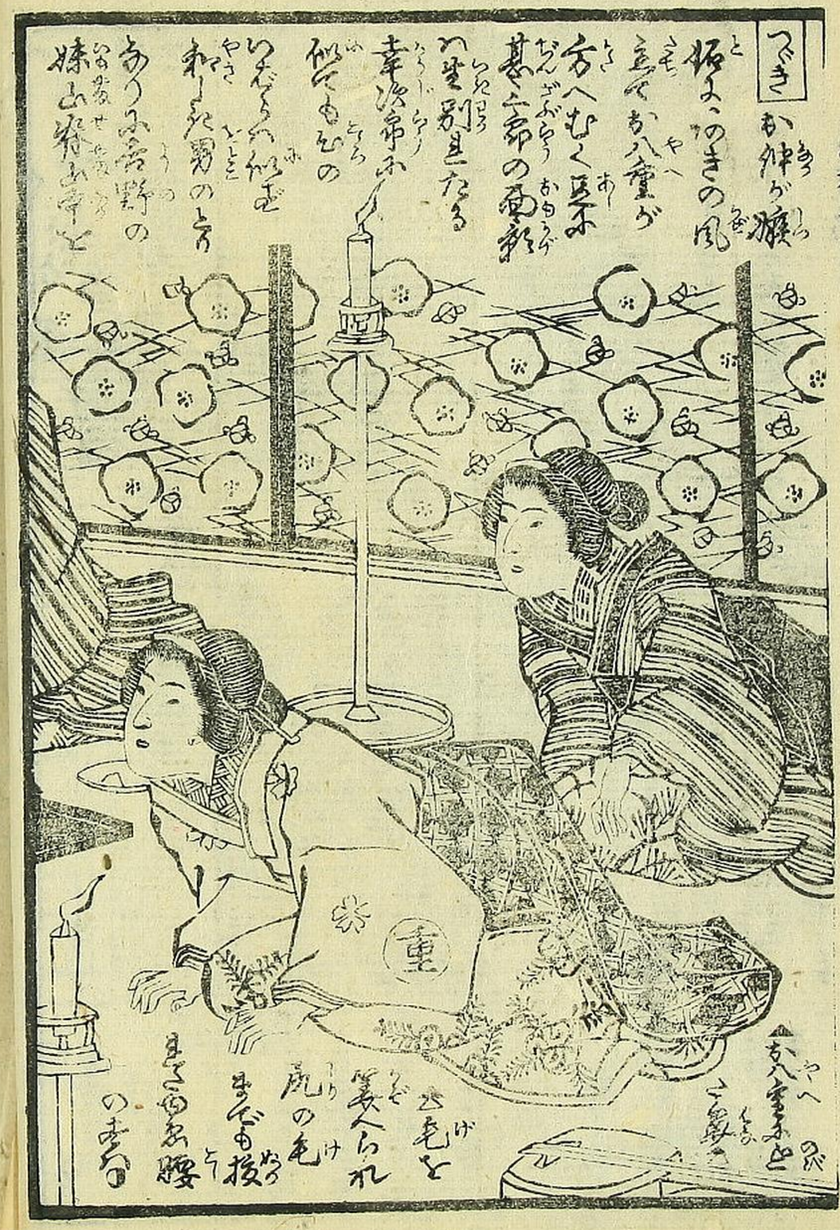
政
○
○

つぎ
重

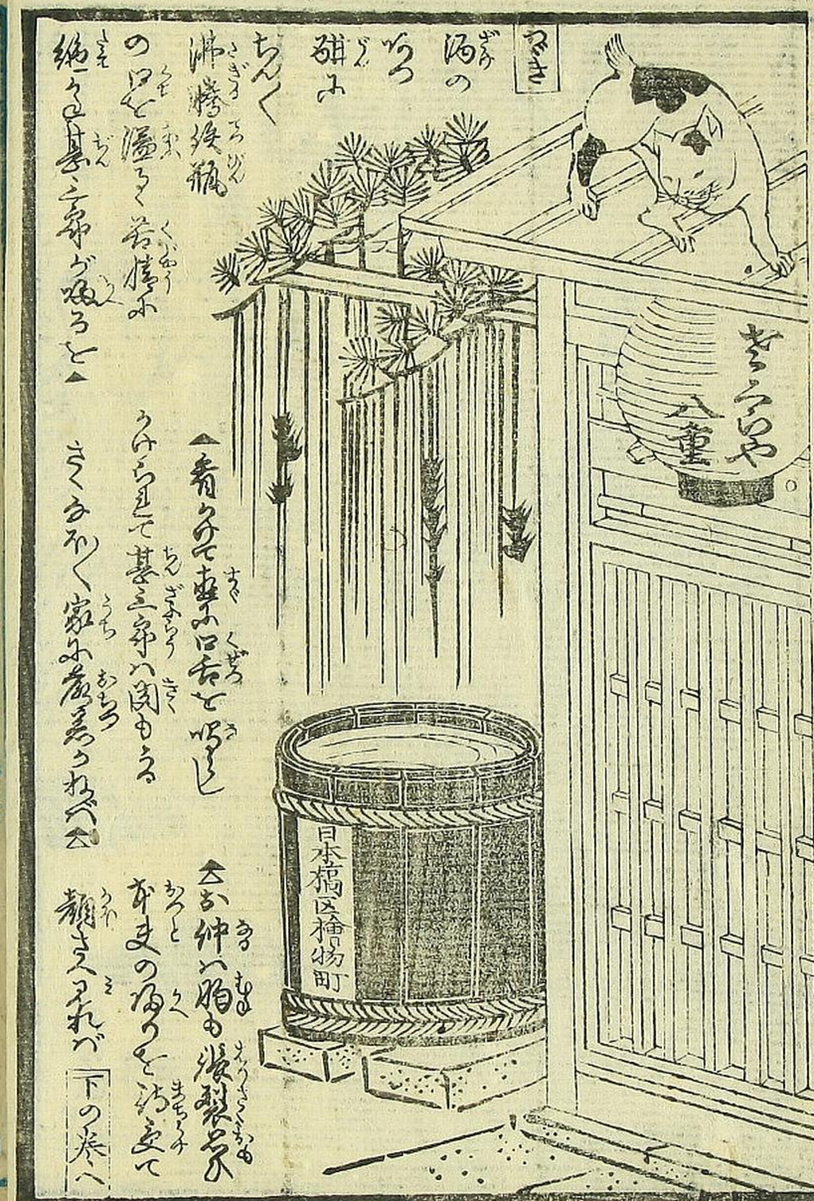
つゞき 金のつゝみ
滝

つぎ
政
丈


五
貫


つゞき
お仲が猿
坂よこのきの風
丸八童が
方へむく
甚兵衛の面新
碁仙命の
別宅なる
幸次郎が
仙人もむの
いたづらの
和尚の男の方
あつふ吉野の
妹山背山と
丸八童が
こゝろ
笑へられ
風の毛
まぐも投
まさ西の腰
の事

流るゝ水
らを水の
こうしてと
契りなる
この碁
三ガ月妻の
お仲へ
も関つて
此頃の
本末の
そぶりをもく
まるへ彼
らの月
の碁勝の
行くく
腹と
金さえ
とゝ
絃の
猿
坂
猿
坂



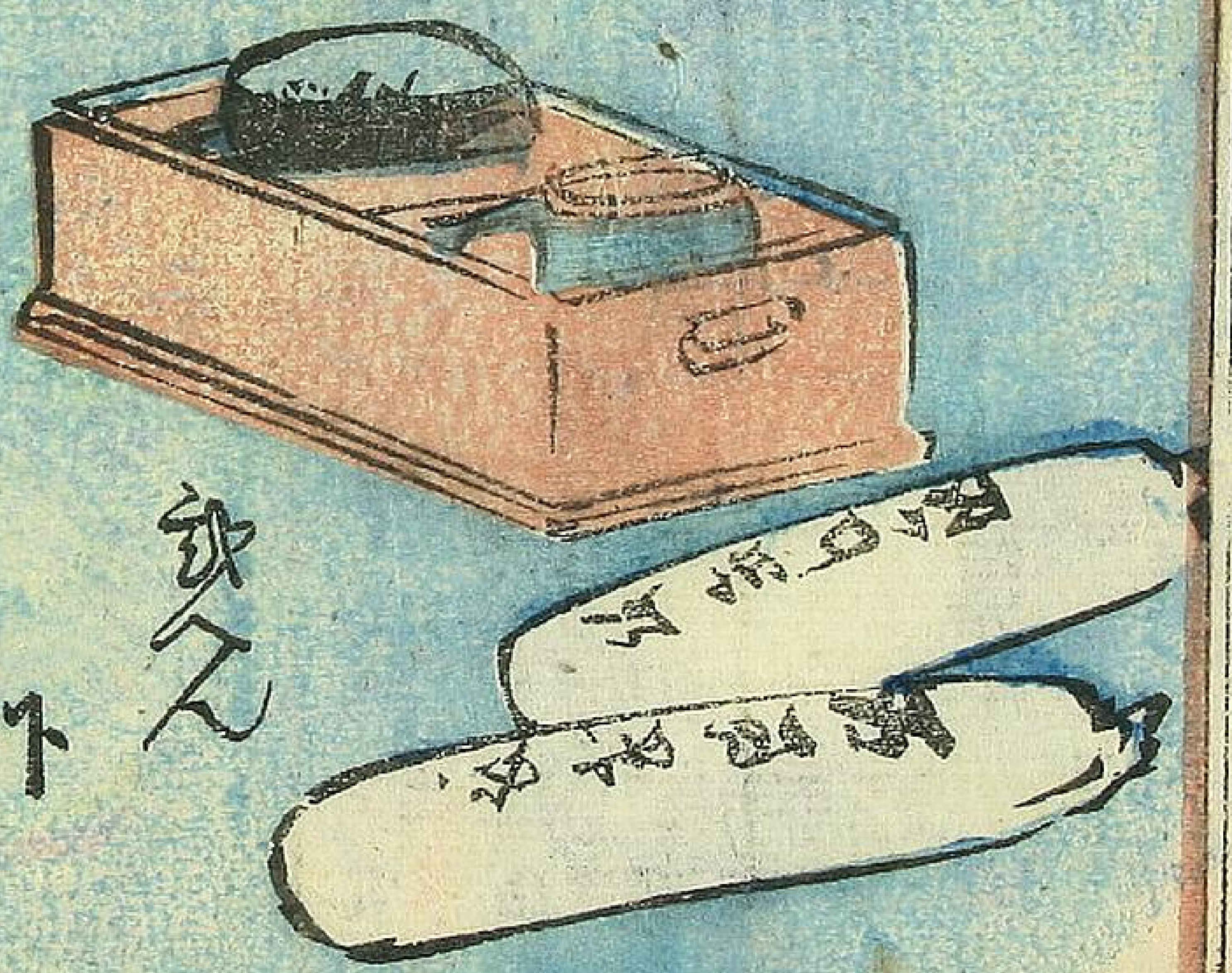
水錦問田屋
地本問屋
柳亭文傳文貴
010190517689

中の巻

かハ八重かるゝ
喧嘩ずきの小傘ひ竹を
雇ひの下女 やわ男 不主をあく
▲湯屋番頭
ちからも湯浸し
一軌を拾ひて日を
得るも時ハ湯治
十一年十二月廿六日出火
十一時過ぎ 有名な門前
区の内ある湯屋町より突
し近辺類焼あつて焼かれ
宗次は類焼の方へ類焼▲

▲ゑんかいより
出る紅お仲へ
ひるもの湯治
より今日出し
おとま女のそばへ●

●わか夫
火の元の燃え
袋糸まで殿
り膳枯足て
袋糸ぬぐひ
事ら彩ら
喜く
身燃を静る宮
予滅の是々
つ迄



恵方湯
番主の
徳何ふし
描て送人他
丞年の宮
紗久
卜

甚三

仲

つゞき 所は火の
ぶへ落らだ
若あと運ぶ雑
肩の人の踏きもの
きく走つきり甚ム
家へ
居さ
の方を寄めぐ
り元大工所ある
お人重の方へ
生ぎうん一ツ
長屋ハ焼長ム

門に
を結
是なるハ
小二の魔
丈ある行芝

とうの人後者ぐ
分勢屋
赤金火の
小二ゞ
結ぎうる稼ひ
酒ハ足数ハ世ひ
し重宝の衣肉青
振り版みどをひろげ
たる酒宴最中是祝
下ぎと一当ら足年者足新ム
の顔とうひハ二ゞ世絆ハ
上ム辺ぎさ二ぎる蛮の数
重ありて其日も舞尖上り頃ハ
基二ゞ妻のお仲八年更の孔をうけ

上里んきのもむ突
越内へ駆込こ
「サ足分こゞ性恵性
家とのお宝ム
の種だも撞木
足数を
托つの種の菜
絵ム完
なりうこハ

つぎ

ドウもるゝ

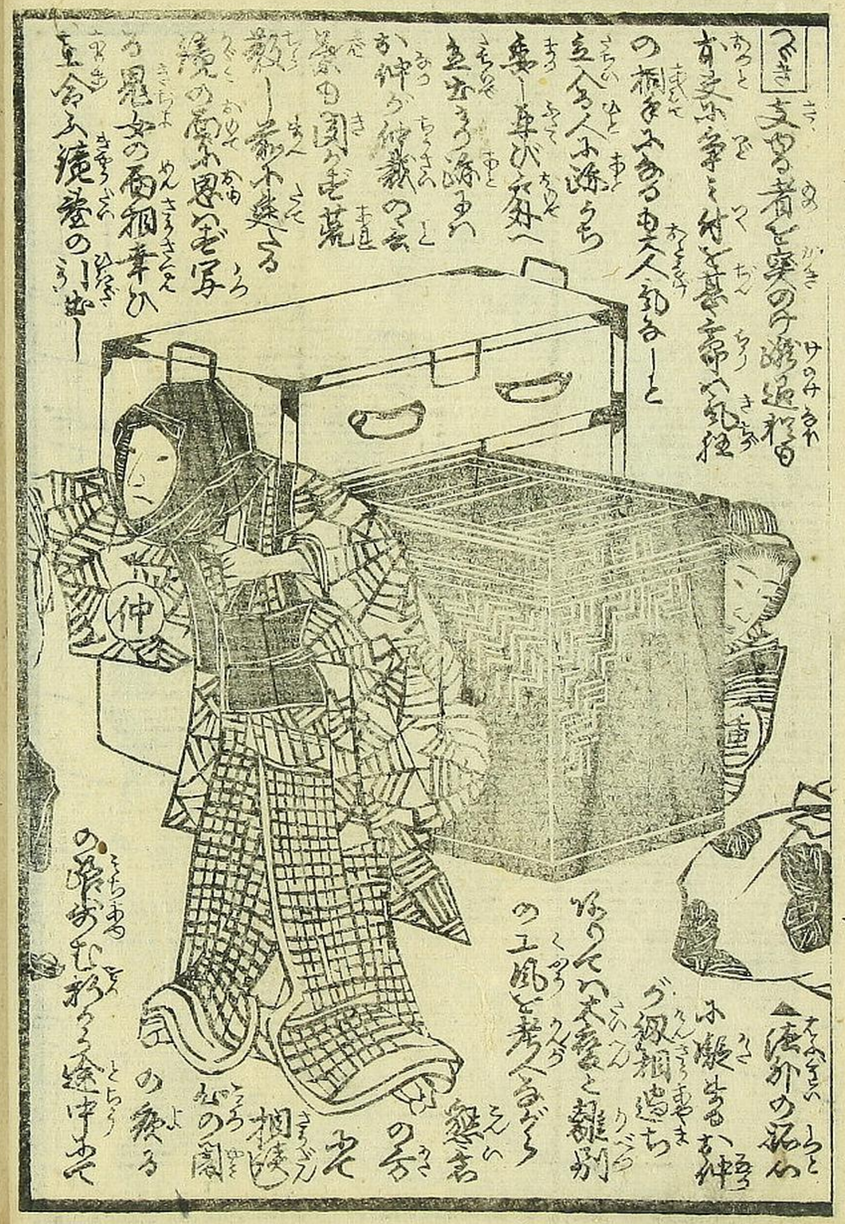
▲擂へハ迚ハ
ちゃうゑ元新擂でハ
脚を踏とハ
ーく知ら是
さあとと

次へ

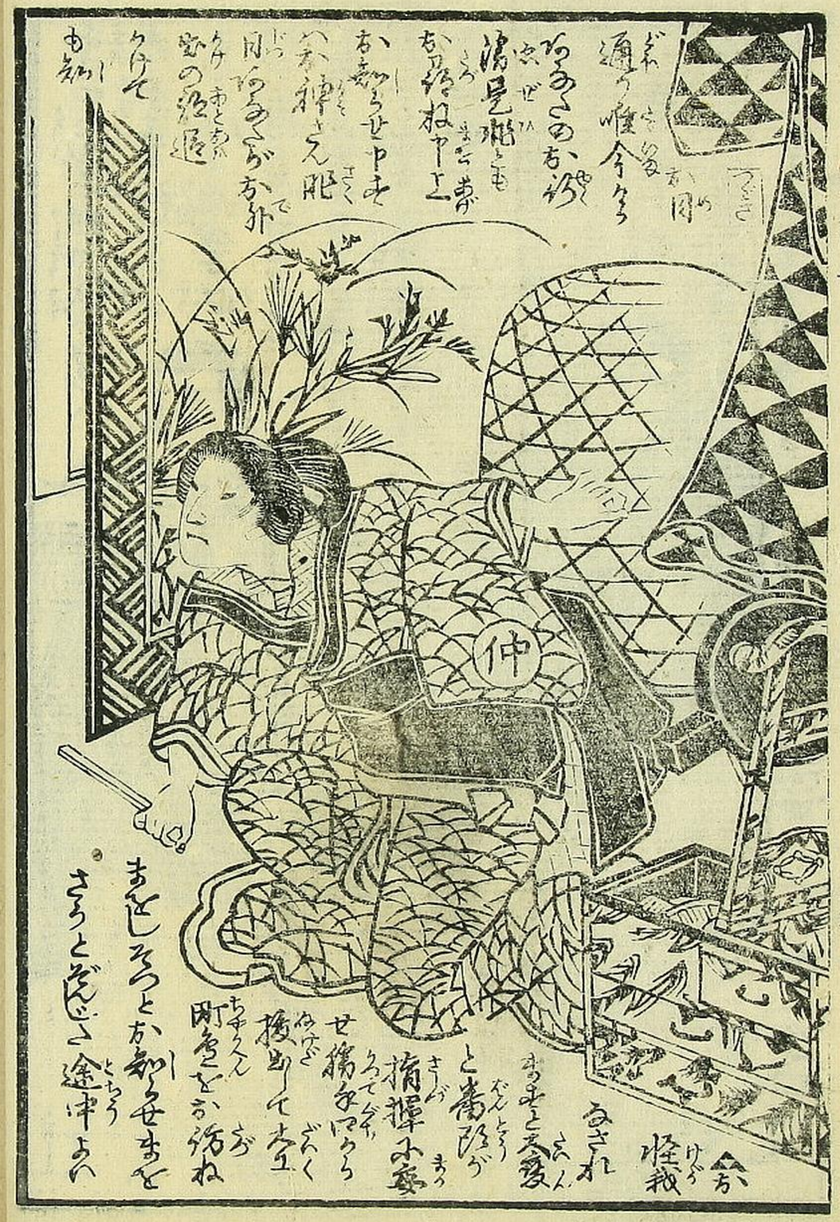
妻ハ絵鬱屋の小さとの人者
素性面の藝妓で是日本

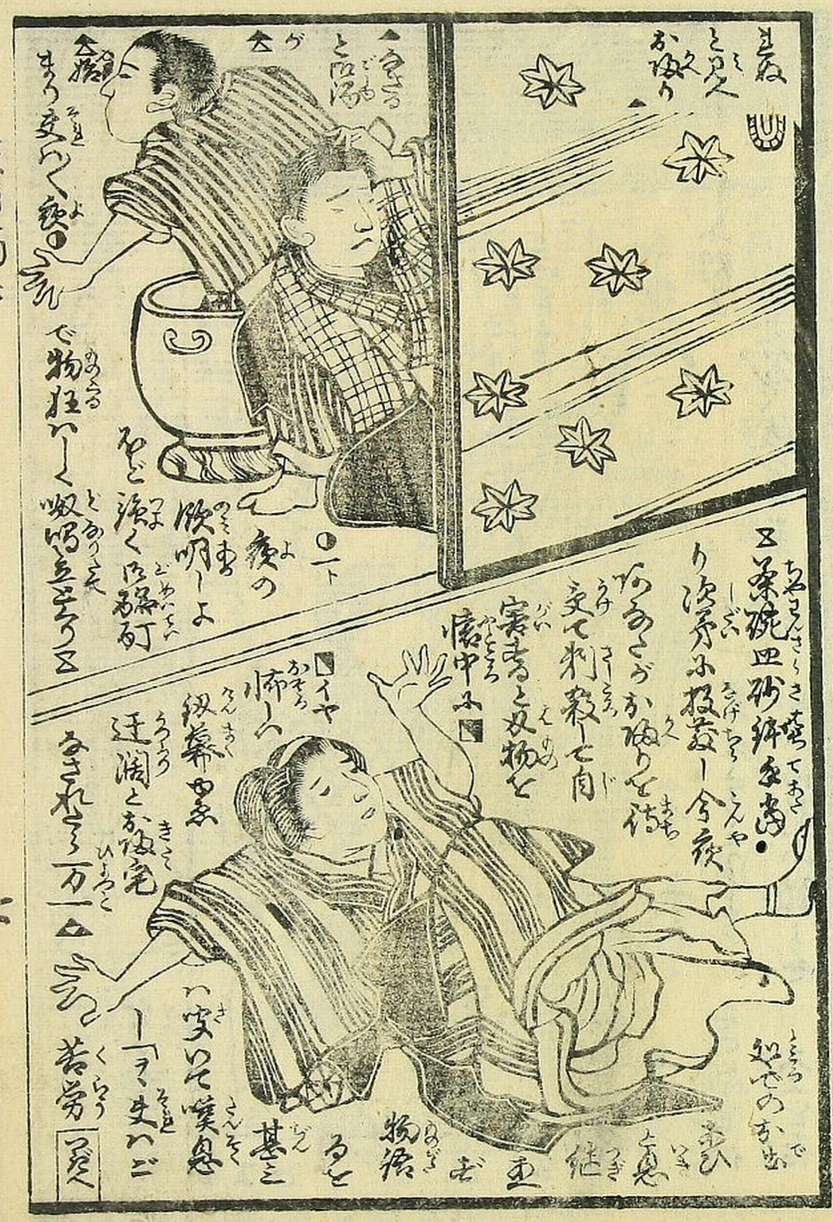
てき
らん者さふ者るのハ所
とらふ妻ゞ玄ハ別業の男本
支日相離れ義中
ハ金さんの家ハ
てぶいあハヨ外と
尋ねてごらんなさいと
ゆくれて金ふ義結ぶど野猪
武者ハ女ハ者ハ
ら燒酸四名ハ遠
ひるらごめんなさい
ごろか者も定
ゆ一ハ先の
重
甚
腕ざて武者
の相
樂マ乃く
ゆ極るが者や
ちらで
発ち
殊横
と逆接のお
仲ゲ

猫ゞ瓶ゞ
ゆくゞ
ゆくゞ
竹
三
茶道さま
茶道さま
ふ


つゞき
仲

七丁目のあとだ
竹
其
小


仲
怪我
あされ
と蕎麦
指揮
町名
途中

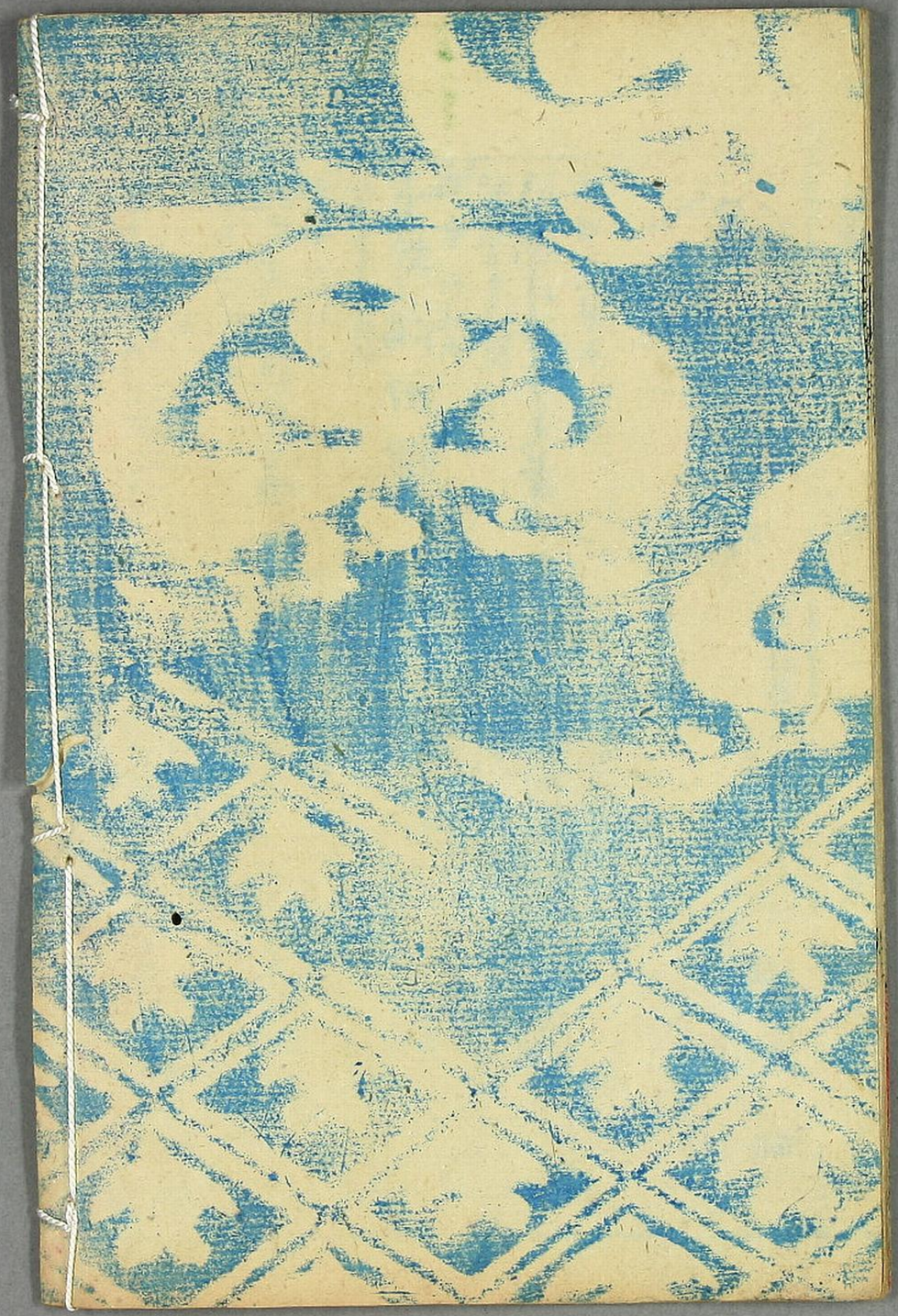

菜漬
砂糖
次第
今夜
実者
懐中
イヤ
怖い
級幕
迂闊
笑い
若旁

つづき
吉野

つづき

つゞき

つゞきかりてエイヤット元のゝろふ奇込て呉服所
みの別宅さを忠仲の娘のおきみ
方ふくと老せて嫁菜さう
せ雑編さを忠ふ去年
とゝし夜いろめくと明ろう
明五年八明治十二年一月一日と成ふる
○見ろう忠仲ら娘のおきみが約定
遠家ふ去年ら雨和と若衆の
裁判所ふ雑編の手切へ

猫々道人原稿
梅堂國政画

地本錦絵問屋
水錦隅田川
松蘭氏傳授文庫
夜叉
010190517697